そしてそれは青春で３

黒崎ろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
そしてそれは青春で３

【Ｎコード】
Ｎ８０７７Ｘ

【作者名】
黒崎ろう

【あらすじ】
朝倉政長は２４歳で絵を描くのが好きな若者で、自分の生きてきた人生と今の自分のあり方とこれからの自分について悩んでいる若者らしい若者。そんな彼がある出会いをきっかけに変わるかもしれないし変わらないかもしれない。そんな物語。

【1】お見舞い（前書き）

第3部です。そんな感じです。

まぁとりあえず読んで下さい。

【1】お見舞い

とある総合病院。

僕はとある友人の見舞いに訪れていた。

高校時代の同級生で、最近はあまり連絡は取っていなかったが、それでもたまに仲間内で会っては互いの近況を酒を交えて報告しあう。そんな感じの気の置けない友人の一人。

久しぶりに連絡が取れたと思ったら、『交通事故に遭った』ときた時にはさすがに驚いた。

だがまぁ本人は至って元気で、痛々しいのは見た目だけらしいが……。

僕は事前に聞いていた番号の病室へ向かう。

「えーと……。あ、ここだ」

僕は部屋の番号とプレートに書かれた名前を確認する。

『高柳浩輔』

うん、間違いなくここだ。

「失礼します」

カラカラと入り口の大き目のスライドドアを引き、中に入る。

「えーっと……」

僕は見知った友人の姿を探す。

奥の方かな、と思ってカーテンをひょいと越えたその先には……。

「……」

いた。高柳浩輔は確かにそのベッドにいた。右手右足に大げさな程のギブスをはめて。

それにももちろん驚いた。しかしそれ以上に驚いたのが……。

ベッドの脇の椅子に座ったとても綺麗な女性が、細かく切ったりんごを浩輔にあーん、とその口元に運んでいるまさにその最中であったということ。

これを見た瞬間、僕の中の『リード　オブ　エアー』の機能が発動。

とっさに判断を下す。

「間違えました。なんというか精神的に」

ぺこり。そして回れ右。総員退却だ。

「いやいやいや、間違えてないから！そもそも精神的にって意味が分からないから！」

……

……

……

「こちらが、その、俺の彼女で『二条深雪』さん。で、こっちが俺の高校の時一緒だった『朝倉政長（あさくらまさなが）』」

浩輔からそう紹介があり、その二条さんがぺこりと頭を下げる。

「二条です。この度はわざわざお見舞いに来ていただいてありがとうございます」

「あ、いえ。めったに病気もなにもしない奴がいきなりトラックにはねられたと聞いて様子だけでもと思いまして」

つられてこちらも腰を低く返す。

とうか浩輔の奴、いつの間にこんな綺麗な彼女さんを……。高校の時は女っ気が微塵も無かったってのに……。

「なんか深雪が俺の母親みたいな挨拶してる」

そして本人こんな感じだし。

「なんというか元気そうで安心したよ。退院までは時間かかりそうだけどね」

僕はギブスをちらり。

「うむ。まぁ天が俺に休めと言ってるんだと解釈して、休む事にするよ」

浩輔はのほほんとした様子。下手に深刻そうな感じにされるよりはいいに決まってはいるが。

「バイトは大丈夫なの？かなりの期間休む事になるでしょうに」

「うむ。それが現在の最大の問題点だ。退院まで仕事休むのは正直やばい」

言うほどやばい感じには聞こえないトーンで浩輔は言う。

「やばいからこそ……これを逆にいい機会と捉えて、俺は今後の自分の身の振り方とか考えようと思ってる」

「なにか考えがあるの？」

「今はない。だけど何か考えるさ。なにか、な」

浩輔は先行きが不安というよりはむしろ楽しんでいるような口調で言う。

「お前こそどうなんだよ？まだ絵は描いてるのか？」

浩輔からのごく簡単な問い。

「あー……。描いているよ、もう趣味みたいなものだけどね」

単なる近況確認みたいなものなのに、僕は少しだけ心に詰まるものを感じる。

「そうなのか。じゃあ実家のパン屋継ぐのか？」

「かもね。今じゃすっかりパン作りの方が手に染み付いてきちゃったよ」

僕の実家はパン屋。今はその手伝いをしながら細々と絵を描いている。

美大卒の名が泣くね、これは。

「そうか」

浩輔はあえてかは分からないがそれだけしか言わなかった。

「うん。さて、こうやって話も出来た事だし僕はそろそろ帰るよ」

僕は椅子から立ち上がる。

「あれ？もう帰るの？」

「うん。あんまり長いして馬に蹴られたくはないから」

僕はちらりと二条さんを見る。

「お前……。古い言い回しするな」

「……もっと返し方あったよね」

いつもの。なんかいつもの僕と浩輔な感じでその場のやり取りに幕を下ろし、僕は本当にその場を退散する。

清潔感のある白い廊下。その廊下を出入口へ向かい歩く。

「美大卒の名が泣く……か」

ふとそんなことを口走る。あまり考えないようにしていた事を。

「ふぅ……」

僕は真っ直ぐ病院を出て帰る気にはならず、1階の自動販売機で缶コーヒーを買うと、どこかゆっくり飲めるような場所を探す。

「……ん？」

病院の中庭に程近い場所を歩いていた時、ふと僕の耳にそれは聞こえてきた。

「……」

僕はかすかに聞こえるその音が気になり、導かれるようにその音の源へ向かって歩き出していた。

辿り着いたのは病院内の催し物などが行われるレクリエーションホールであった。

わずかに開いたその扉の先を覗くと、ホールの奥に、立派なグランドピアノが置かれており、音はそこからであった。

美しく繊細でどこか儚げなその音色が奏でられるその様子に、僕は言葉を失った。

うまく言葉には出来ないが、なんというかすごく心にくるものがあったからだ。

そうしてを聴いていると、やがて静かに演奏が終わる。

「ふぅ……」

ピアノを奏でていたその少女は、そこで初めて一人の観衆がいることに気付く。

向けられる驚きの眼差し。

これが僕と彼女とのファーストコンタクトであった。

【1】お見舞い（後書き）

祝・高柳浩輔生存！

……そんなに祝う必要なかったかな？

では次回。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8077x/

そしてそれは青春で３

2011年10月22日05時38分発行